

地域の暮らしに寄り添う放送へ ―コミュニティ放送が育む人と人のつながり―

近年、全国各地で「地域再生」や「まちづくり」という言葉が盛んに語られています。しかし、地域の再生は、新しい施策や外向きの仕組みを導入することだけで実現するものではありません。地域には、長年の暮らしの中で育まれてきた多様な資源があり、住民同士の関係性があります。そうした身近な価値を丁寧に見つめ直し、活かし直す中にこそ、地域社会を支える確かな基盤があります。

地域社会を形づくる上で欠かせないのが、日々の暮らしの中で積み重ねられる日常的なコミュニケーションです。1992年に制度化されたコミュニティ放送は、市区町村という限られた電波の範囲を前提に、地域の出来事や人々の細やかな声をすくい上げてきました。そして、それらを地域の内側で循環させるという、他には代えがたい役割を担ってきました。

私たちが日常的に接しているテレビやラジオなどのマス・メディアは、大量の情報を広く届けるという重要な社会的役割を果たしています。一方で、その特性上、地域内の細かな事情や個別のニーズに十分応えることにおいては難しい面もあります。だからこそ、地域には地域固有のメディアが必要とされてきました。

コミュニティ放送の多くは、中心市街地の衰退や産業構造の変化、過疎化といった地域課題への危機感を背景に誕生しています。こうした課題が共有されている地域では、コミュニティ放送は単なる情報提供にとどまらず、地域の合意形成を支えるメディアとして存在感を高めていきます。

コミュニティ放送が他のメディアと大きく異なるのは、放送事業者自身が地域で暮らす「生活者」であるという点です。パーソナリティは、少子高齢化や雇用、医療、後継者問題といった街の課題を、自らの生活の延長として語ります。仕事として情報を伝えるだけでなく、地域で共に生きる立場から語られる言葉は、聞き手の心に自然と届きます。こうした地道な営みこそが、コミュニティ放送ならではの価値を生み出しています。

また、住民自身が制作や語りに参加することで、情報は一方通行ではなく、相互に行き交うものとなります。いわば「情報のキャッチボール」が日常的に行われることで、地域の中に対話と信頼の土壌が育まれていきます。

コミュニティ放送は、普段の生活の中で気軽に使える身近な情報ツールでもあります。放送されるCM一つをとっても、地域の商店の特売情報やイベントのお知らせなど、生活に直結した情報が多く含まれています。また、企業や行政からのメッセージを、地域の課題や暮らしに即した言葉に置き換えて伝えられる点も、このメディアの大きな特長です。こうした情報に日常的に触れられることは、街や隣人を「気にかける」意識を育て、地域のつながりをより確かなものにしていきます。

これからのコミュニティ放送は、単なる放送局の枠を超え、地域社会の課題に向き合い

続ける「まちづくりのメディア」としてのプラットフォーム的な役割が期待されています。地域貢献という言葉にとどまらず、地域に支えられている存在であることを自覚し、その意味を明確にすることで、地域社会にとって欠かせない存在へと発展していくことが求められています。地域内のコミュニケーションを媒介しつつ、公共性を担う広告・広報メディアとして確立していくことは、住民自らが地域の未来を形づくる大きな力となるでしょう。

コミュニティ放送は、災害時や特別な行事のときだけに機能するメディアではありません。日々の暮らしに寄り添い、何気ない住民の声を積み重ねてきたからこそ、地域のつながりが保たれてきました。こうした日常の積み重ねは、地震や台風などの自然災害はもとより、いざという時に地域の中で情報が行き渡るための下地となります。結果として、非常時にも力を発揮する地域のレジリエンス（回復力）につながっていきます。

老若男女を問わず国民の皆様には、ぜひ日常のさまざまな場面で、ご自身の街のコミュニティ放送を生活のツールとして積極的に活用していただきたいと思います。また、放送事業者の皆様には、地域生活者の視点を大切にしながら、地域の可能性を共に拓くパートナーとして、今後も活躍されることを期待しています。日常の中にある地域内情報およびコミュニケーションの循環にあらためて目を向けることが、より豊かで安心できる地域社会を築く第一歩となるのではないのでしょうか。そのためにコミュニティ放送があると言っても過言ではないと思います。